

早期成園化の推進によるナシ産地維持への取組

～ジョイント仕立ての導入と栽培管理技術の向上～

1 活動のねらいと背景

白井市は、県内最大の面積を誇るナシの大産地です。しかし、樹の老木化とそれに伴う生産力の低下が課題となっています。ナシは、改植した若木が収量を十分に確保できるまでに時間がかかるため、若木の時期の未収益期間が改植の阻害要因となっています。そのため、産地を維持していくためには、早期成園化樹形の導入による改植の推進が重要となります。また、これまで早期成園化技術であるジョイント仕立ての導入を進めてきましたが、新規の技術であることから、成園化後の栽培管理での課題も出てきており、栽培技術の向上が望まれます。

そこで、ジョイント仕立ての導入と栽培管理技術の向上により、産地を維持するための普及活動に取り組みました。

2 普及活動の経過

(1) 果樹経営支援対策事業の活用

J A西印旛と連携して、しろいの梨育苗センターで大苗を購入する予定の生産者に対して個別に巡回を行い、補助事業について周知しました。また、補助事業の活用希望者に対しては、要件を満たしているか等を事前に確認し、補助事業を円滑に活用できるよう支援しました。

(2) ジョイント仕立て現地検討会の開催

ア 新梢管理の検討会

新梢管理の方法や側枝確保の対策等の情報交換・意見交換を通して、生産者の栽培管理技術向上を図るために現地検討会を開催しました。検討会では、白井市内でジョイント仕立てをいち早く取り入れている生産者ほ場を視察するとともに、新梢管理の方法や側枝確保の対策について意見交換をしました。農業事務所からは、新梢を確保するための技術として、芽接ぎの実施を提案し、概要とやり方について実際に実演しながら説明しました。



現地検討会での情報交換

イ せん定の現地検討会

せん定の現地検討会では、ジョイント仕立てにおける課題である「安定して陰芽発生するようになるまでの側枝更新が難しい」という点について、その要因と対策

に分けて検討しました。班に分かれて「側枝の切除の仕方」をテーマとし、側枝の切除の仕方を話し合いながらせん定作業をしました。せん定後に各班の代表者がせん定方法について説明することで、班ごとのせん定の考え方について理解を深めました。

3 活動による変化と動き

(1) 果樹経営支援対策事業の導入

継続した補助事業の周知によって、ジョイント仕立ての導入が継続的行われ、令和4年～7年の4年間の省力化樹形導入面積は83a、合計344aとなりました。補助事業を活用した改植が定着しており、今後も継続して改植が行われていく見込みです。

(2) ジョイント仕立て栽培管理技術の向上

検討会での芽接ぎの解説・実演により、実際に2件の生産者ほ場で新梢確保の技術として芽接ぎが取り入れられるようになりました。

また、検討会での農業者間の技術交流や巡回での技術指導を通して、ジョイント仕立てへの理解が深まったことにより、令和4年～令和7年の4年間で、収量1.5t/10a以上の早期成園化達成農家数は4戸増加しました。生産者からは検討会を継続して開催して、意見交換を続けたいとの意見も多く出たため、次年度も検討会を開催することになりました。



生産者間での意見交換



様々な側枝の切り方

4 今後の課題と活動

果樹経営支援対策事業を活用した、ジョイント仕立ての導入が定着してきました。しかし、しろいの梨育苗センターが令和7年度をもって閉鎖することになり、今後ジョイント仕立てや2本主枝一文字整枝を導入するために必要な大苗を、産地内で確保することが困難となっています。継続して改植を進めるためにも、大苗を安定して確保できる体制を検討する必要があります。

5 担当グループ名 北西グループ